

---

# 永遠の記憶

リック

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永遠の記憶

### 【コード】

N03170

### 【作者名】

リック

### 【あらすじ】

亡き姫を想う騎士の、追憶のラブストーリー。

## Prologue (前書き)

この作品は

ブログ「お頭と宝の地図」に掲載していた

「永遠の記憶」と「サイドストーリー・永遠の約束」に加筆・修正を加え、再構成した物です。

## Prologue

夢の中では、あの女性は何も変わらず今も微笑んでいる。声も面影も、そして優しさもあの時のままで。

しかし、「クレン」と、俺の名を呼ぶその声は、聞こえそうに聞こえなかった。どんなに手を伸ばしても届かない存在は、本当にもう二度と手の届かない場所に行ってしまったから。

美しい、長い銀の髪にティアアラをのせて微笑む、あの優しくも凜とした表情は、もう二度と見ることはできない。決して言うまいと心に秘めた想いとあの言葉も、やはり伝えることのできないまま終わってしまった。

どうして、あなたの元へ行ってはいけないのですか。俺が嫌いでしたか、姫？

。決して許されぬ想いと知っていても、俺はあなたが好きでした

## 約束

貧しい村で父親に育てられた俺は、幼いころから家の手伝いをし、薪を割り、草を刈り、遠い町に、収穫した作物を売って暮らしていた。時々、近所に住むアーシャと言う少女がそれらを手伝ってくれたりもした。

アーシャは俺や父さんと同じ平民で、俺に母さんがいないように、彼女は父親を病で亡くしていた。母親も病床に伏せていたが、貧しいばかりに薬が買えず、ただ回復を願って見守るしかなかった。どうにかしてやりたくっても、俺や父さんにはそんな力も、財産もない。

「いつもいつも、手伝ってもらってるのに、何にもしてやれなくて、力になってやれなくてごめん」

俺は、収穫したばかりのわずかな野菜を丁寧に布切れで拭いているアーシャに、力なくそう言った。何も出来ない歯がゆさから、自分への怒りがこみ上げてくる。

「いいのよ、べつに。何かをしてもらいたくって手伝ってるんじゃないし、この仕事が好きなの。水を汲んだり、野菜を拭いたり、お掃除したり。そういう事をしている時が一番幸せを感じられるの。人の役に立てるって幸せなことでしょ？」

アーシャの顔は、本当にそれが幸せなことであるかのように煌々と輝いていた。

貧しくても、どんなに生活が大変でも、自分のことのように人の幸せを喜べるアーシャ。そんな彼女に対してどうして天はこうも不公平で無情なんだと、その笑顔を見るたびに思う。

きれいな服を着て、美味しい物を食べて、高貴な生活してもバ

手は当たらないだろうに。

\*

やっぱり、天は無情だった。女神様なんていない。

あんなにも優しく欲を知らない少女から、たった一人の肉親を奪っていくなんて。

浜辺の二つの足跡を、小さな波がゆつくりとさらっていく。俺とアーシャはそんな光景をぼんやりと眺めながら、落ちてゆく日の光を全身に浴びていた。

不意に、アーシャがそこにある重たい空気を裂くように、ゆつくりと口を開いた。

「あたしね、叔母さんのところに行くことになったの」

「え……？」

「叔母さんは、家の手伝いをしてくれる人を探してるんだって。だから……」

「そんな！ それじゃあまるで使用人扱いじゃないか！」

アーシャの言葉がまるで信じられなかった。自分を扱き使おうとしている人のところへ行くなんて。

「いいの。雨がしのげて、ご飯が食べられればそれで。たとえ小間使いになっても、家政婦になっても」

「アーシャ……」

アーシャはすすで汚れた銀の髪を揺らして、無邪気な笑顔を浮かべた。そつと小指を立てる。

「約束して。また、この海岸で会って約束。5年後よ。私は19歳でクレンは21歳ね」

「……つらくなったら、戻って来いよ」

俺はそつと彼女の小指に指を絡ませ約束を交わした 再会の約束を。また逢えると、そう信じて。

\*

あの日から3年の月日が経った。優しかった父さんは1年前にアーシャの母のように病床に伏して亡くなった。貧しいが故に薬が買えなかったからだ。

俺は騎士になることを決め、毎日必死で剣を振っている。それもこれも、ほかならぬアーシャのために。

しかし、叔母のもとに行ったはずのアーシャは、その叔母に家計の足しとしてどこかへ売られ、それをまた貴族に売られ、今は宮殿で小間使いとしてつらい生活を送っているという。

あくまで町から流れてきた噂でしかないが、それが事実ならどれだけ過酷なことだろう。

\*

「クレンデイス・デュアー」

合格者の名が記された羊皮紙の最後の名前を読み上げて、教官は顔を上げた。俺は騎士らしい碧の甲冑に身を包み、少し緊張した面持ちで前に進み出た。

「今日より、お前に騎士としての称号を授ける。国と、騎士の名に

恥じぬよう、その身をもって忠誠を尽くすのだぞ」

「はい、教官」

俺はその場にひざまずいて、教官の持つ剣を受け取り、それを掲げるようにして誓いの言葉を詠んだ。

「私、クレンデイス・デュアーは国王陛下に絶対の忠誠を誓うことをここに」

教官は無言でうなずき、羊皮紙を丸めて懐へとしまいこんだ。

俺がゆっくりと立ち上がるうとしたその刹那、白いドレスを翻して、銀の髪を背中に流した美しい女性が俺の目の前をすれ違うようにして通っていった。

女性は振り向き、蒼い瞳で教官を見据えると、口角を上げた。

「この騎士が、選抜でもっとも優秀な成績を残した方ですか？」

教官の唇が動く前に、俺の口が己の名前を告げていた。

「はい。クレンデイス・デュアーです」

これが、俺とフィセアナ様の運命の始まりだった。

一人の名もない騎士と、一国の王女 決して心を通わせることのないはずの二人。

この時はまだ、誰よりも愛し、大切にした女性<sup>ひと</sup>を失うことなど知るはずもなかった。

## 運命

「私が王女様の騎士にですか？」

思いもよらない陛下の言葉に、俺は目を見張った。

騎士の称号を賜って3ヶ月、まだ「見習い騎士」であるはずの俺に、陛下は姫付の騎士になれと命じられたのだ。

「フィセアナの 王女の騎士となってくれな」

陛下は王座から身を乗り出すようにして俺を見下ろしながら、期待のこもった声でそう言った。

「はい、誠心誠意お仕えし、この命に代えても王女様をお守りいたします」

俺はその場にひざまずき、深々と頭を下げた。

「何があっても、国王である私よりも王女を優先して守れ。私とフィセアナが瀕死の状態にあらば、お前が救うべきはフィセアナだ。

そのことを、しかと肝に銘じろ」

陛下は語気を強めて最後の言葉を言うと、深紅の絨毯が敷かれた廊下の両側にいる侍女達に軽く手招きをした。

背後で侍女の靴音が響き、彼女は俺のすぐ隣まで来ると陛下に向けて深々と頭を下げた。

「デユアー騎士をフィセアナの部屋に案内しなさい」

陛下は長く伸びた白いあごひげを意味もなくさわりながら、侍女にそう言い付けた。

「こちらが王女様のお部屋です」

侍女はそう言うなり、だだっ広い廊下の真ん中にある、大きな、金の装飾が施された白い扉をゆつくりと開いた。

少し薄暗いその部屋の奥には、窓から差し込む日の光を全身に浴びた、白いドレスの女性が立っていた。彼女は紛れもなく、称号を授与された時に声を掛けてくださった、あの女性ひとだった。

ワンピースに似た白いドレスに、映える銀色の長い髪を腰の辺りで揺らしながら、今しがた俺と侍女の存在に気付いたように、姫はゆつくりと振り返った。

「あなたは、あの時の方ですね」

そう言い、微笑む姫の姿が、なぜか、今もそのままの姿で俺の記憶に残るアーシャの無垢な笑みと重なった。あのまま一緒にいられたら、今頃はアーシャが成長した姿を見られたかもしれない。きっと、きつとこの女性ひとのように美しい少女になっていただろう。

「では、私はこれで失礼いたします」

不意に聞こえた侍女の声で、刹那に見た遠い記憶から引き戻された。

侍女はゆつくりと後ずさり、丁寧に扉を閉めると、去って行った。俺は足音が聞こえなくなったのを確認すると、深々と頭を下げた。

「今日より、王女様の護衛騎士となりました、クレンデイス・デュアーです」

「あなたが、護衛騎士になったのですね……」

姫の、どこか不安げな、哀愁を帯びたような声に、俺は思わず顔を上げた。

「俺ではご不満でしょうか」

姫は静かに首を振った。

「いいえ、そんなことはありません。ただ、ただ少し残念なのです。あなたは選抜で最も優秀な成績を残したと聞きました、それなのに

私の護衛などになり、騎士としての才能を発揮できないなんて……」  
「何をおっしゃいます。姫にお仕え出来るという、これ以上の榮譽はありません」

俺はその場にひざまずき、称号を授与されたときと同じように、鞘に納まった剣を掲げて頭を下げた。

「私は榮譽だと思われるほどの人間ではありません……。ですから立ってください」

姫の言葉に、俺は顔を上げてゆっくりと立ち上がった。姫の蒼い瞳がまっくと俺を見つめている。

「それと、私の事は姫ではなくフィセアナと呼んでください」「いけません、姫 そんな……」

そう言いかけて、再び過去の記憶が甦った。

アーシャと初めて会った日のこと 海岸で砂の上に書いた二人の名前。今でも、彼女とのあのやり取りは鮮明に思い出せる。

《あなたは「クレインデウス」？》

《違う！ 何でそうなるんだよ「クレンデイス」だ》

《じゃあ、クレンね。あたしは「アーシャ」》

《やだよ、「クレン」なんて女の子みたいだ。それに、どう読んでも「アーシェ」だろ》

《仕方ないじゃない、波が字の半分を消していつちやうんだから》

砂の上に書いた名前は、波にさらわれては途切れ、書いてはまた途切れていった。夕日の中、消えていく名前を読みながら笑い合っていた子供時代も、あの再会の約束も、同じように波にのまれて消えていつてしまった。

## 込めた願い

時が経つのは早い。姫の騎士となつてから、じきに2ヶ月が過ぎようとしている。

姫は俺のことを「クレン」と呼び、俺は姫のことを「フィセアナ様」とお呼びすることとなった。本当なら、王女をお名前で呼ぶことなど許されない、しかし、「姫」と呼びかけてもあの方は返事をしなかった。

《姫、聞いておられますか？》

《私の事は「フィセアナ」と》

《そのようなワガママはおやめください》

《……》

《……姫、それはご命令ですか》

《このような身分も地位も、私にはふさわしくないのです。ですから、「姫」などと呼ばないでください》

《何をおっしゃいます、あなたほど高德で立派な方はおられません》

《あなた達は、そうやって心にもないことを、なぜ簡単に口に出れるのですか？》

《姫……》

《クレン、あなたが私を「姫」と呼ぶのなら、もう返事をしません》

《……姫の、フィセアナ様の意に従います》

それ以来、公おおやけの場以外では「クレン」、「フィセアナ様」と、まるで合言葉のようにお互いをお呼び合っている。

「クレン、あの星は何ですか？」

不意に姫に呼びかけられ、テラスへと出ていたことを思い出した。「フィセアナ様、あまり前に出てはなりません」

俺は、柵から身を乗り出しながら、まるであどけない少女のように顔を輝かせる姫に、そう言った。しかし、彼女はそれを聞き入れるどころか、さらに前に乗り出し、夜空に光る星々を指差した。

「あちらの方にある星は、まるで兄妹のようですね。仲良く寄り添っているように見えます」

「兄妹……ですか？」

「はい。私は一人なので、昔から「兄」という存在に憧れていました。クレン、あなたには、あの星は何に見えますか？」

俺はゆっくりと、姫のように柵から身を乗り出しながら、夜空を見つめた。遠く、つかむことの出来ない存在たちが煌々と輝いている。

「俺には兄妹にも見え、恋人にも見えません。あの星を見ると、故郷にいた幼馴染が思い出されます。友達であり、妹のような存在であり、想う相手でもありました」

しばし静寂が続いた後、姫がそれを裂くように口を開いた。

「ねえクレン、あの星を私たち二人だけの秘密の星にしませんか？ 名前は「シイリア」にしましょう。この国の古代語で「2つの愛」という意味です」

そう言う姫の瞳は、夜空に輝く星ではなく、俺を見つめていた。あの時のアーシャと同じ、無垢な笑みを浮かべて。

「しかし、「シイリア」は古代語では「2つの愛」ですが、直訳すれば「

俺が言いかけた言葉を遮るようにして、姫が静かに言った。

「……私をいつまでも愛してください」、「あなたを永久とわに想います」です。 いけませんか？」

大胆とも取れる不意な発言に、俺は戸惑いを隠せなかった。姫の透き通るような声が、言葉が、何度も何度も頭の中で繰り返される。俺は雑念を振り払おうと、頭を軽く振った。きっと姫は、星に美しい名を付けたかったのだろう。騎士ともあろう者が、いったい何を考えているんだ……。

## 想い

「クレン」

いつものように窓の向こうに沈む夕空を見つめていた姫は、不意に純白のドレスを翻して、俺を見つめた。

「あなたは、なぜ騎士になったのですか？」

その問いに、俺は少し間を空けて答えた。

「微力ながらも、この国の 陛下のお役に立ちたいと思ったからです」

「本当に、それだけでですか？」

どこか訝しげに、フィセアナ様がそう聞き返す。なぜ姫はこのよ  
うなことを俺に尋ねるのだろう。

「はい。姫に嘘や偽りなど申しません」

俺はゆっくりと頭を下げた。フィセアナ様が俺を見つめたまま静かに咳く。

「私には想う方がいます」

「姫……！」驚きに思わず顔を上げそうになった。聞いてはいけな  
い言葉を聞いてしまった。一国の王女に、恋い慕う方がいるなど……

「その方は、私には手の届かない、とても遠い所にいます。ですが、諦めることができません。忘れようとすればするほど、その方への想いは深まっていきます。クレン、どのようにしたら愛する人に想いを伝えられますか？」

姫の言葉に、何故か切なさがかみ上げてきた。胸が、痛い。

「 フィセアナ様はこの国の王女であられます。ですから……」

「あなたに想う方がいるように、私にも想う方がいるのです！」

姫は語気を強めてそう言った。俺はゆっくりと目を伏せて、小さく深呼吸すると、真っ直ぐと彼女を見つめた。

「……では、手紙をしたためるといふのは、どうでしょう。その方には俺が責任を持ってお届けいたします」

「はい、そうします。でも、書いた手紙は今届けないでください」  
姫の言葉に俺は少し戸惑いを覚えた。

「お渡しにならないのですか？」

「いいえ。でも、今は、今はだめなのです」姫はそう言うと、少し間をあけて、続けた。

「手紙は、完成したらこの部屋のどこかに隠しておきます。時が来たらその場所をあなたに伝えるので、その時、手紙を渡してください」

「……はい」乾いたような、かすれた声が出た。姫は唇に少しだけ笑みを浮かべて、窓の方を向いた。

「『愛するあなたへ』そう書いて、もし仮に誰かの手へ渡ってしまったとしても安全なように、宛名は伏せておきます」

その言葉にまた、胸が痛んだ。

なぜだろう、体の奥から熱いものが込みあがってくるようだ。視界がぼやけて、物が、姫が重なって見える　立っているのもつらい。

「クレン？」

姫の心配そうな声が聞こえる。大丈夫です　と、口に出してるはずなのに、声として響いていない。次の瞬間、転地が逆転したように全てのものが逆さになり、遠のく意識の中、姫の悲痛な叫び声が聞こえた……。

\*

気が付くと簡易寝台に寝かせられていて、ロイルス教官が額にのせられているタオルを交換してくれている所だった。

「騎士たる者、おのれの体調管理もできずどうする！」

俺は寝台から上体を起こして、シーツの上に落ちたタオルをぎゅつと握り締めた。

「申し訳ありません！ 姫の前でこのような見苦しい姿を見せた上、教官にご迷惑を掛けるとは……」

「いいか、主は従のためにいるのではなく、主のために従がいるのだ。主に仕え、護るためには体調管理や休息は当然のことだ。それを怠った者は真の騎士にはなれぬ。たとえ武術や文学に優れていてもな」ロイルス教官は静かにそういつて、小さなため息をついた。まるで、過去の自分に言い聞かせるかのように。

不意に、扉を開く音が聞こえ、教官と俺が振り向くと、そこにはなんと姫が立っていた。

「姫様！」教官はすぐに椅子から立ち上がり、姿勢を正し、俺もどうにか寝台から降り、まだ少しふらつく足元をどうにか奮い立たせた。

「姫様、なぜこのようなむさ苦しく見苦しい場所へ」教官の言うとおり、ここは狭く、埃っぽい雑務室だった。周りは色あせた資料が溢れんばかりに押し込まれた棚に囲まれ、中央には資料が積み重なった机と、木の椅子がある。

「彼が急に倒れたので、様子を見に来たのです」

姫はそう言って俺を見据えた。教官が眉をひそめる。

「ご無礼を承知で申し上げますが、たかが騎士の1人にすぎません。例えこの者が死のうとも、代わりの騎士は大勢おります。ですから、わざわざこのような場所に来られる必要はありません」

「なんという言い方です！」姫が語気を強めてそう言つと、ロイルス教官を軽くにらみつけた。「それでもあなたは騎士たちの手本となるべき教官なのですか。この世に無駄になつて良い命など、ある

わけありません!」

この言葉は　アーシャがいつだったか言っていた言葉に似ている。あれは、彼女の母が亡くなった日だったのだろうか。

《ねえ、クレン……お母さんはきっと天国にいけたよね?》

《……》

《世の中には、身分の差っていうのがあって、お金持ちで豪邸に住んで、王様に仕えてる人と、あたし達みたいに貧しくって、服や薬もまともに買えない人……その両方がいるけど、あたしは幸せだよ?　だって、この世に生まれてこれたんだもの。お母さんの子供に生まれて、あなたを友達に持って、そして好きになった。少しだけど、字も読めるし。ほら、幸せでしょ?》

この世の中に「どうでも良い命なんてない」って信じてるから。みんな人は意味を持って生まれてくるの。お父さんも、お母さんも、あたしも、そしてあなたも　》

気付くと、口の中でアーシャの名を呟いていた。教官を睨んでいた姫の視線が、こちらへと向けられる。

「行きましよう、クレンデイス。ロイルス教官は何を言っても分かっていただけないようですよ」

姿勢を正して教官に一礼し、俺は雑務室の扉をそつと開いた。姫が純白のドレスを翻してゆっくりとくぐって行く。

廊下へと出ると、姫は銀色の髪を揺らしながら真っ直ぐと俺を見据えた。

「私の事は気にせず、今日は部屋で休んでください。後で侍女に果物を届けさせます」

「俺は一介の騎士に過ぎません、そのような事はなさないでください。すぐに回復します」

無礼と分かっているとしても、何故か姫から視線を逸らしてしまう。俺を見る瞳を真っ直ぐと見つめ返すことが出来ない。

「何を言うのですか。もし無理をしてあなた身に何かあったら……私はとても耐えられません！」

少し震えているような、透き通る声

「なぜ、俺のような者を気遣うのですか。貧困層の村で育った卑しい俺なんかを……」

不意に姫が俺の手をそつと握った。あまりに急なことに俺は戸惑いの表情で彼女を見上げた。姫は今にも泣きそうな表情で俯き、静かに首を振る。

「そんなこと……言わないでください。だって、私は、私はあなたの、あなたの」「言いかけて、小さな嗚咽を漏らすと、何かを思い出したように、姫は言葉を付け加えた。「あなたの……事を心配しているのに……」

姫はゆっくりと顔を上げた。その表情がまたアーシャと重なって見える。

俺はなんと愚かな人間なのだろう。一国の王女に、このような言葉を掛けられているのに、心の中にある別の女性の面影と重ね合わせているなんて……。

「クレン」

名を呼ばれ、俺は姫を見た。気付けば、まだ手は握られたままだった。しかし、振り払うなどという無礼な事は出来ない。

「手を、お放しく下さい姫」

「いやだと言ったらどうしますか？」

まるで答えを探るように、先ほどとは打って変わって、俺の瞳を姫はじつと見据える。

「ご冗談はお止めください、あなたはフェリシアの王女です……。臣下には平等に接しなくては」

「それが、答えなのですか……？」

姫は依然と俺を見つめたままそう言う。俺は静かに瞳を伏せた。

「俺はあなたの騎士で、あなたは俺が仕え、守るべきお方です。そして、それ以下でも、それ以上であつてもいけません」

「……そうですか、分かりました。わがママを言つてしまい、すみません」

俺の手の上に重ねた掌がゆっくりと離れて行き、姫の寂しげな表情の上には、無理に繕つたその場しのぎの微かな笑みが浮かんでいった。

「では、訓練で疲れた騎士の方達すべてに果物を贈つておくように侍女に言つておきます。それでしたら何の問題も無いでしょう……」

？ あなたもちゃんと受け取ってくださいね……」

俺は何も言えず、ただ小さく一礼した。真つ直ぐと、姫を見るこ  
とができない。

姫がその場を去つてからも、頭の中ではあの女性ひとの悲しげな表情  
と言葉だけが焼き付いて、それは一日中決して離れることはなかつ  
た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0317o/>

---

永遠の記憶

2010年10月8日13時25分発行